

氏家寛勝著

## 『陀羅尼思想の研究』

片 野 道 雄

本書の著者である高野山大学教授・氏家寛勝氏は、一九八五年（昭和六十年）に四十六歳という若さで急逝された。氏は、一九七一年に高野山大学ネパール学術調査団の副団長として、ヒマラヤ周辺の仏教文化の実地調査に、一九七九年には同大学の第三回チベット仏教文化調査団の一行と共に、北インド・ラダック地方に、引き続き一九八二年にも第四回チベット仏教文化調査団の団長として、スピティ地方に出かけられている。それだけに急逝の報は余りにも突然で信じ難いことであった。

氏は、かねてよりインド仏教思想史の流れを洞察しつつ、大変興味深い視点を折々の発表の機会に提起されていたが、本書は、数多くの論文の中から、ダーラニー (dhārāṇī・陀羅尼) 思想を解明し発表されていた代表的な論文九編が選ばれ収載されている。

昭和五十九年春にも著者は『陀羅尼の世界』（東方出版刊）を發表された。この書は、『聖愛』誌上で「陀羅尼講話」として連載されていたものに基づき、加筆追加してお纏めになったものであるが、仏教思想史の流れの中でダーラニー思想について冷静にしてユニークな着眼を試みつつ、判りやすい表現によっ

て「陀羅尼とは何か」という点を、一般読者人のためにやさしく説いて解明して下さったのである。この度刊行された本書は、それらの解明に至った、あるいは、素材とされたであろう論文の代表的なものが収載されているのである。論文の中でも、今後更に究明すべき諸問題の幾多を提起されているとは言え、本書収載の諸論文によって、近代仏教学的な「陀羅尼思想」の解明の基盤がすでに築かれているように思われるのである。その意味からも本書の刊行は意味深い。

ところで、本書の構成は、論文の發表年時順に収載されているのでなくて、「Ⅰ」念佛より陀羅尼へ、「Ⅱ」ダーラニー説、「Ⅲ」陀羅尼から真言陀羅尼へ、の三章のもとに取り纏められている。巻末には、著者の「略歴」並びに「主要著作目録」が附せられている。

第一章には、

「念佛より陀羅尼へ」

「初期大乘經典の親近善知識」

「聞持陀羅尼について——陀羅尼の原意とその展開——」

の論文三編が、第二章には、

「多聞の熏習としてのダーラニー説」

「護法と總持」

「大集經における陀羅尼の研究」

「法師を守護するもの」

「今日ではダーラニーは真言と同一視され、ダーラニーといえば真言陀羅尼を意味すると考えられている。」(本書七一頁)と著者が述べているように、仏教の思想的な流れの中で、ダーラニーの思想が解明されていない現状を鑑みて、取り組まれていた。ここに収載されている諸論文は、ダーラニー思想の形成と発展に視点が置かれている。しかも、初期仏教(原始仏教)ではダーラニー説は存在せず、ダーラニー説は大乗仏教独自の教義、思想であるとして、初期大乘經典に説かれるダーラニー説から中期以後の大乘經典や密教經典にあらわれる真言としての陀羅尼呪へという発展が解明されようとしている。

第一章の第一編に組まれている論文では、その大乘独自の教義として形成されるに至るダーラニーの思想的背景について、先ず考察されようとしている。

初期仏教の色身無常説から大乘の永遠の佛陀觀へと發展する佛身觀が主に注目され、併せて、初期仏教の「觀念の念佛」の中に、口称の念佛を汲みとることも可能であることを指摘している。佛身觀に注目されるのは念佛と陀羅尼が菩薩行の根底をなすものとして、大乘佛教の興起と伝承に深くかわわっている教義または思想であると、考えられていることによる。念佛思想を佛身觀との関連の中で、『ニカーヤ』並びに『ミリンダ王の問い』(特にこの資料の扱いに感銘をもつ) から『ディヴァ・アヴァダーナ』へと辿り、更には、『般若經』『般若三昧經』『華嚴經』『入法界品』など初期大乘經典における様相にその究明がなされている。そして、「インドでは二世紀の大乘仏教の興

起直後から念佛と陀羅尼とを同視する考えがあった」(本書二五二―二六頁)とし、「教説を完全に記憶して忘れない陀羅尼が、念佛三昧の自明の内容として包摂」されている点に言及している。更に、「念佛も陀羅尼も、空の般若波羅蜜の理解と伝承にかかわっていた」し、「陀羅尼はとくに大乘の教法を記憶して忘れしめない念力(記憶力)の意義と性格を有していた。その記憶の対象となる大乘の教法とは説者なる佛によって与えられるものであるから、陀羅尼はかならず念佛を前提とした。念佛もそれは単に色身の相好を念ずることだけに終るものではなく、「念法による」値佛と同時に聞法を予想するものであったから、發生は異なっていたけれども、陀羅尼と念佛とは必ず関係しなければならぬものであった」(本書二七頁)と進めている。「私見によれば、般若波羅蜜の聞法こそ念佛と陀羅尼とが結びついた決定的要素であった」(本書二九頁)とも述べている。空觀にまで深められた念佛・念法は般若波羅蜜の憶持で出発した陀羅尼と結びつくことに至ったと看做されている。そしてまた、大乘が興起した当時から善知識によって正法が護まれ、そのことを通じて正智に導かれることが強調されている經典の記述に注目して、善知識はしばしば法師と同一視されていて、その法師である善知識は、大乘の宣教や伝承に大きな役割を演じているという。大乘仏教の諸佛や法を歴史的な現在に位置づけ、伝承させていく役割をもって活躍するその善知識の教えに、親しく接して菩薩行が遂げられていく菩薩行の基本として、値佛聞法の念佛や、聞法憶持の陀羅尼が帰せられるこ

とを著者は更に研究視野においている。

第一章第二編は、そのように位置づけられる親近善知識という点を取り扱われている。続いて第三編では、無生法忍に注意しつつ、ダーラニーの原意を尋ね、「経法を憶持して忘れない」という聞持陀羅尼 (dhāraṇa-dhāraṇi) の究明が中心となっている。聞持陀羅尼を「聞持することが陀羅尼である」という持業に理解し、更に、聞數習、聞薰習の思想への展開に言及して、陀羅尼思想の大乘にとっての重要性が確認されようとしている。

第二章所載の第一編の論文は、多聞薰習としてのダーラニー説を中心とするものであって、それらの検討は著者の最も注意を注いだ初期大乘佛教におけるものである。それらの検討の中で、この時代のダーラニー説は、真言呪との関係はないが、関連性をもつに至っては、ダーラニーと神呪との関わりがあくまで目的 (ダーラニー) と手段 (神呪、真言) という依存関係にあるとする観点が貫かれている。そして、中期以後の大乘經典や密教經典に見られる真言としての陀羅尼呪 (dhāraṇi-mantṛa) の思想と明らかに区別されるとしている。

真言ダーラニー (mantradhāraṇi)、ダーラニー句 (dhāraṇi-paḍāni) などの合成語について、それらはダーラニーと同一視する向きの見方に対して、前者は「真言」というダーラニー」というように同格限定複合語に理解するのでなく、「真言を成就させるダーラニー」というように格限定複合語とでも理解すべきで (本書九三頁)、また、後者は「ダーラニーという (真言)

句」ではなく、「ダーラニーを得るための句」と解さなければならぬ (本書九六頁)、と述べ、真言句や真言は直接、ダーラニーを意味しなく、真言は三昧を内容とするダーラニーの契機または手段となるものである、という。大品系般若經にダーラニーの種々の功德が見られるが (本書七七頁)、『智度論』に照応させての解明や、それとも関連する四十二字門のダーラニー説の論究も注意を引く。

また、この章の第二編では、大乘經典の受持崇拝と深い関係をもつ「正法の護持」(すなわち護法 *saddharmaṃparigraha*)、或いは、總持 (dhāraṇi) を検討している。護法とは、大乘教徒自身のために正法を受けとめ、わがものとする菩薩の内なる確信を意味すると共に、法を説き示す法師 (dharmabhāṇaka、説法者) を尊敬し供養し、擁護、守護することであるとする。經典には、法師に対する諸天の守護という記述が見られると共に、守護のための真言すなわち守護呪 (mantrapadāni) が説かれるようになる点について究明し、護法と法師と守護呪とダーラニーとの関係、或いは結びつきが大乘諸經典の上で解明されようとしている。

第三編は、大集經における陀羅尼思想の考察であって、「科学研究」「大集經の総合的研究」の分担の報告である。その後、更なる研究によって取り纏められたように聞き及んでおり、いささか気になっていたのであるが、最近、「大集經における陀羅尼説」と題して『成田山仏教研究所紀要』第十一号特別号 (仏教思想史論集Ⅰ、成田山新勝寺、一九八八) に掲載された。『大

集經』の主に「陀羅尼自在王菩薩品」「寶女品」「海慧菩薩品」などの所説に基づき究明されている。とりわけ綿密な解明がなされており、また、ダーラニー思想の本格的な研究が進められることになったのは、この科研によるようであるから、上記の論文も本書に収録してほしかった。

第三章には、初期大乘仏教のダーラニー思想がどのように発展して、真言陀羅尼に包括止揚されるに至ったか、という視点に基づく労作が収められている。

その第一編は「初期密教の解脱観」である。初期の雑密經典において、作佛・正覺（解脱）を目的とするダーラニーと、現世利益を目的とする神呪とが別々に説かれていた点と、この別々に説かれていたダーラニーと神呪とが後に同化して両者の区別がつかなくなると共に、同化したがゆえに神呪にも作佛の目的が加えられるに至った点との、二点にそって考察が進められている。第二編は「毘盧遮那佛の説法」である。本学仏教学会の公開講演会で講演していただいたものの要旨である。更なる研究課題の芽ばえを感じたことである。巻末の「主要著作目録」

によると、最後の労作のようである。転法輪印の毘盧遮那に対して、密教の、いわゆる智拳印の毘盧遮那の世界に注目しつつ、密教の法身説法について、主に空海の説に基づいて解明されようとしている。

以上、まずしい理解にもとづき、本書の内容をいささか紹介してきたが、いずれの論文にも著者の温厚な人柄、着実な研究が発揮されている。陀羅尼理解に貴重な成果であろう。それと共に、仏教の流れの中にあつて、陀羅尼思想の解明を通しての仏教との出遇をまのあたりになされているようにも思われる。なお、収載されている論文の間には、重複した資料の扱いや論究、或いは、用語の不統一も見られる。それらは本書の成るにつけての事情もあつて、決して本書の刊行の意味を損うものではない。貴重な論文の数々をこのように纏めていただき、関係の方々へ御礼申し述べたい。

（昭和六二年二月、東方出版<sup>（株）</sup>、A5版、一九五頁&九頁、二八〇〇円）